

唐模樣

泉鏡太郎

青空文庫

麗姫りき

おも 惟ふに、描えがける美人びじんは、活いける醜しうぢよ女よよりも可かなり也なり。傳つたへ聞きく、
 漢かんの武帝ぶていの宮きうじん人りけん麗とし娟とし、年としはじめて十四しじゆ。玉たまの膚はだ艶あややかにして皓しろ
 く、且かつつ澤さうふ。たきもしめざる蘭らん麝じやおのづから薰かをりて、其その行ゆ
 くや 蚊け蝶ふ相あ飛ひとべり。蒲ほりう柳せん纖じやく弱やく、羅ら綺きにだも勝たへ難がたし。麗り娟けん
 つね 常つねに身みの何いづ處くにも瓔やう珞らくを挂かくるを好このまず。これ袂たもとを拂はらふに當あたり
 て、其その柔やはかなる膚はだへたまふ珠たまの觸ふれて、痕あとを留とどめむことを恐おそれてなり。
 知るべし、今いまの世よに徒いたづらゆびわ指おほ環ほつの多ほつきを欲ほつすると、聊いさか其その抱ほう負ふを
 異ことにするものあることを。

麗娟宮りけんきうちう中に歌うたふ時は、當代たうだいの才人さいじん李延年りえんねんありて是これに和わ
 す。かの長生殿ちやうせいでん裡り日月じつげつのおそき處ところ、ともに風くわいふうの曲きよくを
 唱しやうするに當りてや、庭前ていぜん颯さつと風興かぜおこり、花はなひらくと翻ひるがへること、
 恰あたかひも霏々ひとして雪ゆきの散ちるが如ごとくなりしとぞ。
 此この姫きまた毎つねに琥珀こはくを以もつて佩おびとして、襲衣しふいの裡うちに人ひと知しれず包つみ
 て緊しむ。立居たちゐ其その度たびになよやかなる玉たまの骨ほね、一つく琴ことの絲いとの如ごと
 く微妙びめうの響ひびを作なして、聞きくもの血ちを刺さし、肉にくを碎くだかしめき。
 女子粧ぢよよそほはば寧むしろ恁かくの如ごときを以もつて會くわい心しんの事こととせん。美顔術びがんじゆつ
 に到いたりては抑そも々く末すゑ也なり。

勇將ゆうしやう

おなじとき、賈雍將軍は蒼梧の人、豫章の太守として國の境を出で、夷賊の寇するを討じて戦に勝たず。遂に蠻軍のために殺され頭を奪はる。

見よ、頭なき其の骸、金鎧一縮して戟を横へ、片手を擧げつゝ馬に跨り、砂煙を拂つてトツくと陣に還る。陣中豈驚かざらんや。頭あるもの腰を抜かして、ぺたくと成つて瞪目して之を見れば、頭なき將軍の胸、屹然として馬上にあり。胸の中より聲を放つて、叫んで曰く、無念なり、戦利あらず、敵のために傷はれぬ。やあ、方々、吾が頭あると頭なきと何れが佳きや。時に賈雍が従卒、おいくと泣いて告して

いは、かしら
 曰く、頭あるこそ佳く候へ。言ふに従うて、
 将軍の屍血を噴
 いて馬より墜つ。

勇將も傑僧も亦同じ。むかし行簡禪師は天台智大
 師の徒弟たり。或時、群盜に遇うて首を斬らる。禪師、斬
 られたる其の首を我手に張子の面の如く捧げて、チヨンと、わけ
 もなしに項のよき處に乗せて、大手を擴げ、逃ぐる數十の賊を
 追うて健なること驚の如し。尋で瘡癒えて死せずと云ふ。壯なる
 哉、人々々。

愁粧
 しゅうしやう
 粧

むかし宋の武帝の女、壽陽麗姬、庭園を歩する時梅の花散りて一片其の顔に懸る。其の倂また較ふべきものなかりしより、當時の宮女皆争つて輕粉を以て顔に白梅の花を描く、稱して梅花粧と云ふ。

隋の文帝の宮中には、桃花の粧あり。其の趣相似たるもの也。皆色を銜ひ寵を售りて、君が意を傾けんとする所以、敢て歎美すべきにあらずと雖も、然れども其の志や可憐也。

司馬相如が妻、卓文君は、眉を畫きて翠なること恰も遠山の霞める如し、名づけて遠山の眉と云ふ。魏の武帝の宮人は眉を調ふるに青黛を以つてす、いづれも粧ふに不可とせず。然るに南方の文帝、元嘉の年中、京洛の婦女子、皆悉く愁

うび、うび 泣粧きふしやう、墮馬髻だばきつ、折要歩せつえうほ、齟齬笑うしせうをなし、貴賤きせん、尊卑そんび、
 たがひそ、たがひそ 互に其の及およばざるを恥はぢとせり。愁眉しうびは即すなはち眉まゆを作つくること町内ちやうない
 の若旦那わかだんなの如ごとく、細ほそく剃ありつけて、曲まがり且かつ疎すくむを云いふ。泣きふし
やう粧めは目めの下したにのみ薄うすく白粉おしろいを塗ぬり一ひと刷はけして、ぐいと拭ぬぐひ置お
そ其さまの状みだ涙みだにうるむが如ごとし。墮馬髻だばきつのものたるや、がつくり島し
まだ田いと云おなふに同あじ。案あんずるに、潰つぶしと云いひ、藝げい子こと云いひ投なげと云いひ、奴やつこ
ぶんはた文きん金わ、我わが島田しまだ髻まげのながつくりと成なるは、非ひ常じやうの時ときのみ。
しか然げんるを、元嘉げんか、京きやう洛らくの貴婦人きふじん、才媛さいゑんは、平へい時じに件くだんの墮馬髻だばきつ
ゆを結むすふ。たとへば鬻まげを片潰かたつぶして靡なびけ作りて馬うまより墮おちて髻もとの横よ
こさま状くづに崩なりれたる也なり。折要歩せつえうほは、密そつと拔ぬきあし足あしするが如ごとく、歩行あゆむに
わ故なと惱なやむを云いふ、雜ざつと癩しやく持もちの姿すがたなり。齟齬笑うしせうは思おもはせぶりに

て、微笑む時毎に齟齬の痛みに弱々と打撃む色を交へたるを
 云ふ。これなん當時の國色、大將軍梁冀が妻、孫壽
 夫人一流の媚態より出でて、天下に洽く、狹土邊鄙に及びた
 る也。未だ幾ほどもあらざりき、天下大に亂れて、敵軍京師に
 殺倒し、先づ婦女子を捕へて縦に凌辱を加ふ。其の時恥辱
 と恐怖とに弱きものの聲をも得立てず、傷み、悲み、泣ける容
 粧はざるに愁眉、泣粧。柳腰鞭に折けては折要歩を苦し
 み、金釵地に委しては墮馬髻を顯實す。聊も其の平常の化
 粧と違ふことなかりしとぞ。今の世の庇髮、あの夥しく顔
 に亂れたる鬢のほつれは如何、果してこれ何の兆をなすもので。

捷術せふじゆつ

隋ずいの沈ちん光くわう字あざは總持そうぢ、煬やう帝たいに事つかへて天下てんか第一だいいち驍捷はやわざの達た
 人つじんたり。帝ていはじめ禪定ぜんぢやうじ寺じを建けん立りふする時とき、幡はたを立たつるに竿さをの
 高さたか十餘丈じふよぢやう。然しかるに大風たいふう忽たちまち起おこりて幡はたの曳綱ひきづな頂たゞきより断きれて
 落おちぬ。これつなを繋つながんとするに其その大おほいなる旗竿はたざをを倒たふさずしては
 如何いかんともなし難がたし。これたふを倒たふさんは不祥ふしやうなりとて、仰あふいで評ひやう
 議ぎ區々まちくなり。沈ちん光くわうこれみを見て笑わらつて曰いはく、仔細しさいなしと。
 太綱ふとづなの一端いったんを前齒まへばに銜くはへてするくと竿さをを上のぼりて直たゞちに龍頭りうづに
 至いたる。蒼空あをぞらに人ひとの點てんあり、飄々へうくとして風かぜに吹ふかる。これ尚なほ
 奇きとするに足たらず。其その綱つなを透とほし果はつるや、筋斗もんどりを打うち、翻然ひらり

と飛んで、土に掌をつくると齊しく、眞倒にひよいくと行く
 こと十餘歩にして、けろりと留まる。観るもの驚歎せざるは
 なし。寺僧と時人と、ともに、沈光を呼んで、肉飛仙と云
 ふ。

後に煬帝遼東を攻むる時、梯子を造りて敵の城中を瞰
 下す。高さ正に十五丈。沈光其の尖端に攀ぢて賊と戦う
 て十數人を斬る。城兵這奴憎きものの振舞かなとて、競
 懸りて半ばより、梯子を折く。沈光頂よりひつくりかへ
 りぎまに梯子を控へたる綱を握り、中空より一たび跳返りて
 劍を揮ふと云へり。それ飛燕は細身にしてよく掌中に舞ふ、
 絶代の佳人たり。沈光は男兒のために氣を吐くものか。

驕奢

洛陽伽藍記らくやうがらんきに云ふ。魏ぎの帝業ていげふを承うくるや、四海しかいこゝに靜せいひ
 謚つにして、王侯わうこう、公主こうしゆ、外戚ぐわいせき、其その富既とみすでに山河さんがを竭つく
 て互たがひに華奢くわしや驕けうえい榮あらせを争あひ、園ゑんを脩をさめ宅たくを造つくる。豊室ほうしつ、洞門どうもん、
 連房れんぼう、飛閣ひかく。金銀きんぎん珠しゆぎ玉ぎ巧よくを極たくめ、喬木けうぼく高樓かうろうは家々かゝに
 築きづき、花林くわりん曲池きよくちは戸々こゝに穿うがつ。さるほどに桃李たうり夏緑なみどりにして竹ち
 柏くはく冬青ふゆあを、霧芳きかんばしく風薰かぜかをる。
 就なかんづく中なかん、河間かかん王深わうしんの居邸きよてい、結構けつこう華麗くわれい、其その首しゆたるも
 のにして、然しかも高陽かうやう王わうと華くわを競きそひ、文柏ぶんはく堂だうを造營ざうえいす、莊さかんな

ること帝居ていきよ徽音殿きおんでんと相齊あひひとし、清水しみづの井ゐに玉轆轤ぎよくろくろを置き、
 わうごんつるべつ黄金きそうの瓶びんを釣つるに、練絹ねりぎぬの五色ごしきの絲いとを綆つなとす。曰いはく、晉しんの石
 崇みを見みずや、渠かれは庶子しよしにして尚なほ狐腋こえきち雉頭ちとうの裘かはあり。況いはんや我われは
 太魏たいぎの王家わうかと。又また迎風館いふうくわんを起おこす。
 室しつに、玉鳳ぎよくほうは鈴すずを啣くみ、金龍きんりうは香かうを吐はけり。窓まどに挂かくる
 もの列錢れつせんの青瑣せいさなり。素柰しな、朱李しゆり、枝撓えだわにして簷のきに入り、妓妾ぎせふ
 白碧はくへき、花はなを飾かざつて樓上ろうじやうに坐ざす。其その宗室そうしつを會くわいして、長ちやう
 夜やの宴えんを張はるに當あたりては、金瓶きんべい、銀ぎん百餘ひやくよを陳ちんね、瑪瑙めなう
 の酒盞しゆさん、水晶すゐしやうの鉢はち、瑠璃るりの椀わん、琥珀こはくの皿さら、いづれも工こうの奇き
 なる中國ちゆうごく未いまだ嘗かつてこれあらず、皆みな西域せいゐきより齎もたらす處ところ。府庫ふこの内うち
 には蜀江しよくかうの錦にしき、呉均ごきんの綾あや、氷羅ひようら、氈せん、雪穀せつこく、越絹ゑつけん擧あげ

て計ふべからず。王、こゝに於て傲語して曰く、我恨らくは石

崇を見ざることを、石崇も亦然らんと。

晋の石崇は字を季倫と云ふ。季倫の父石苞、位已に司徒に

して、其の死せんとする時、遺産を頒ちて諸子に與ふ。たゞ石

崇には一物をのこさずして云ふ。此の兒、最少なしと雖も、

後に自から設得んと。果せる哉、長なりて荊州の刺史となる

や、潜に海船を操り、海を行く商賈の財寶を追剥して、

富を致すこと算なし。後に衛尉に拜す。室宇宏麗、後房數

百人の舞妓、皆綺紈を飾り、金翠を珥む。

嘗て河陽の金谷に別莊を營むや、花果、草樹、異類の

禽獸一としてあらざるものなし。時に武帝の舅に王鎧と云へ

るものあり。驕奢けうしゃを石崇せきそうと相競あひきそふ。鎧飴がいあめを以て釜かまを塗ぬれば、崇そうは蠟らふを以て薪たきぎとす。鎧がい、紫むらさきの紗しやを伸のべて四十里しじふりの步障ほしやうを造つくれば、崇そうは錦にしきに代かへて是これを五十里ごじふりに張はる。武帝ぶてい其そのの舅しうとちからそまけるなとて、珊瑚樹さんごじゆの高たかさ二尺にしやくなるを賜たまふ。王わう鎧がいどんなものだと云いつて、是これを石崇せきそうに示しめすや、石崇せきそう一いつ笑せうして鐵如意てつにいを以もつて撃うつて碎くだく。王わう鎧がい大おほいに怒いかる。石崇せきそう曰いはく、恨うらむることなかれと即すなはち侍僮じどうに命めいじて、おなじほどの珊瑚さんご六七株ろくしちしゆを出いだして償つぐのひ遷かへしき。

然しかれども後遂のちひに其そのの妓ぎ、緑珠ろくじゆが事ことによりて、中書令ちうしよれい孫秀そんしうがために害がいせらる。

河間王かかんわうが宮殿きうでんも、河陰かいはんの亂らんぎやく逆ぎやくに遇あうて寺院じゐんとなりぬ。

唯、堂觀廊廡、壯麗なるが故に、蓬萊の仙室として呼ばれたるのみ。歎ずべきかな。朱荷曲池のあと、緑萍蒼苔深く封して、寒蛩唧々たり、螢流二三點。

空蟬

唐の開元年中、呉楚齊魯の間、劫賊あり。近頃は景氣だ、と徒黨十餘輩を語らうて盛唐縣の塚原に至り、數十の塚を發きて金銀寶玉を掠取る。塚の中に、時の人の白茅冢と呼ぶものあり。賊等競うてこれを發く。方一丈ばかり掘るに、地中深き處四個の房閣ありけり。唯見る東の房

には、弓きう繪えい槍しやう戟げきを持ちたる人にんぎやう形かたあり。南みなみの房ぼうには、繪えい
 綵さい錦きん綺き堆たいし。牌はいありて曰いはく周しう夷い王わう所たまふ賜ところ錦にしき三さん百ひやく端たんと。
 下したに又また棚たなありて金きん銀ぎん珠しゆぎよく玉ぎよくちよを装もれり。西にしの房ぼうには漆しつ器きあり。
 蔣まさ繪えい新あらたなるものごとの如ごとし。さて其その北きたの房ぼうにこそ、珠たまも以かぎて飾ひつぎりたる棺ひつぎ
 ありけれ。内うちに一人いちにんの玉ぎよくちよ女によあり。生いけるが如ごとし。緑みどりの髮かみ、
 桂かつらの眉まゆ、皓かう齒あ恰たかも河か貝ばいをふく含くんで、優い美び端たん正せい畫えいと雖いへども及およぶべから
 ず。紫むらさきの帔かけ、繡ぬひある※、珠したうづの履くつをはきて坐ざしぬ。香かう氣き一いち脈みやく、
 芳はう霞かたなび靨なび黷くく。いやな奴やつあり。手てを以もつて密そと肌はだに觸ふるゝに、滑なめらかに
 白しろく膩あぶらづきて、猶なほ暖たうなるものに似にたり。
 棺ひつぎの前まへに銀ぎん樽そん一個いつか。兇きよう賊ぞく等あ争らつてこれのを飲あむに、甘あまく芳かんし
 きこと人じん界かいを絶ぜつす。錦きん綵さい寶はう珠じゆ、賊ぞく等らやがて意こころのまゝに取とり出い

だしぬ。さて見るに、玉ぎよくちよ女ひだりてが左の手のくすり指ゆびに小ちひさき玉たまの
 鑲わを嵌はめたり。其その彫ほりの巧たくみなること、世よの人の得えて造つくるべきもの
 にあらず。いざや、と此これを抜ぬかんとするに、弛ゆるく柔やはらかに、細ほく白しろ
 くして、然しかも抜ぬくこと能あたはず。頭とうりやう領やう陽やう知ち春しゆん制せいして曰いはく、わ
 い等ら、其それは止よせと。小せいぞく賊き肯かずして、則すなはち刀かたなを執とつて其その指ゆびを
 切きつて珠たまを盗ぬすむや、指ゆびより紅くれなるの血ち衝つと絲いとの如ごとく迸とりぬ。頭とうりやう領やう
 面おもてそむを背いけて曰いはく、於あ、戲いた痛まし哉いかな。
 冢つかを出いでんとするに、矢やあり、蝗いなごの如ごとく飛とぶ。南なんぼう房うの人にんぎや形や
 氏うし、矢やつぎ繼ば早やに射いる處ところ、小せうぞみ賊な皆た倒たかる。陽やうちしゆん知い春いちにん
 まつた全まうするこゝを得えて、取とり得えたる寶ほう貝ばいは盡くくこれを冢つかに返かへす。
 官くわんも亦また後あち、渠かれを許ゆるしつ。軍ぐん士しを遣つかはし冢つかを修をさむ。其その時とき銘めい誌いしを尋たづ

ぬるに得ることなく、誰が冢たるを知らずと云ふ。

人妖

晉の少主の時、婦人あり。容色艶麗、一代の佳而

して帶の下空しく兩の足ともに腿よりなし。餘は常人に異な

るなかりき。其の父、此の無足婦人を膝行軌に乗せ、自ら推し

めぐらして京都の南の方より長安の都に來り、市の中にて、

何うぞやを遣る。聚り見るもの、日に數千人を下らず。此の婦

聲よくして唱ふ、哀婉聞くに堪へたり。こゝに於て、はじめは

曲巷の其處此處より、やがては華屋、朱門に召されて、其の

奥おくに入いらざる處とこ殆ほとんど尠すくなく、彼かれを召めすもの、皆みな其その不ふ具ぐにして艶えんなるを惜をしみて、金きん銀ぎん衣い裳しやうを施ほどこす。然しかるに後こう年ねん、京けい城じやうの諸しよ士しにして、かの北ほく狄てきの回くわい文ぶんを受うけたるもの少すくなからず、事こと顯あらはるゝに及およびて、官やく司にん、其その密みつ使しを案あん討たうするに、無む足そくの婦ふ人じん即なち然しかり、然しかも奸かん黨たうの張ちやう本ほんたりき。後のち遂ひに誅ちう戮りくせらる、愆かくごとの如ごときもの人じん妖えう也なり。

せうねんそう
少年僧

明みん州しうの人ひと、柳りう氏し、女ぢよあり。優い艶えんにして閑かん麗れいなり。其その女ぢよ年としはじめて十六。フト病やまを患ひ、關くわん帝ていの祠ほこに禱らりて日ひあらず

して癒ゆることを得たり。よつて錦繡の幡を造り、更に詣でて願ほどきをなす。祠に近き處少年の僧あり。豫て聰明をもつて聞ゆ。含春が姿を見て、愛戀の情に堪へず、柳氏の姓を呪願して、密に帝祠に奉る。其の句に曰く、

かうなんのやなぎふたばみどりなり
江南柳嫩緑。

いまだはんせつのかげをなさず
未成陰攀折。

なほあはれむしえふのせう
尚憐枝葉小。

くわうりとびのぼるちからかたし
黄鸝飛上力難。

りうしゆしてはるのふかきをまつ
留取待春深。

當代の淑女振を發揮して、いけすかないとて父に告ぐ。父

含春も亦明敏にして、此の句を見て略ぼ心を知り、大に

や、今古の野暮的、娘に惚れたりとて是を公に訴へたり。時に方
 國※氏、眞四角な先生にて、すなはち明州の刺史たり。忽
 ち僧を捕へて詰つて曰く、汝何の姓ぞ。恐るく對て曰く、竺阿
 彌と申ますと。方國僧をせめて曰く、汝職分として人の迷
 を導くべし。何ぞかへつて自ら色に迷ふことをなして、佗の女子
 を愛戀し、剩へ關帝の髯に紅を塗る。言語道斷ぢやと。
 既に竹の籠を作らしめ、これに盛りて江の中に沈めんとす。而し
 て國※、一偈を作り汝が流水に歸るを送るべしとて、因て吟じ
 て云ふ。

かうなんのたけのかうしやう
 江南竹巧匠。
 むすんでかごをつくるによし
 結成籠好。

ごしにあたへてほつたいをかくす
 與吾師藏法體。

へきはふかきところかうりうをともなひ
 碧波深處伴蛟龍。

まさにしるいろこれくう
 方知色是空。

ちくあみ 竺阿彌、めそくと泣きながら、
 おほせ 仰なれば是非もなし。乞ふ吾

さいご 最後の一言を容れよ、と云ふ。
 こくてなに 國※何をか云ふ、言はむと欲

まを する處疾く申せ、とある時、

かうなんのつきかゞみのごとくまたつりばりのごとし
 江南月如鏡亦如鉤。

めいきやうのぞまずこうふんのおもて
 明鏡不臨紅粉面。

きよくこうのほらずぐわれんのほとり
 曲鉤不上畫簾頭。

むなしくみづからとうりうをてらす
 空自照東流。

こくおほい わら 國※大に笑つて、
 ばか 馬鹿め、おどかしたまでだと。これを釋し、

且つ還俗せしめて、柳含春を配せりと云ふ。

魅室

唐の開元年中の事とぞ。戸部郡の令史が妻室、美にして才あり。たまく鬼魅の憑る處となりて、疾病狂せるが如く、醫療手を盡すといへども此を如何ともすべからず。尤も其の病源を知るものなき也。

令史の家に駿馬あり。無類の逸物なり。恆に愛矜して芻秣を倍し、頻に豆を食ましむれども、日に日に瘦疲れて骨立甚だし。舉家これを怪みぬ。

鄰家りんかに道術だうじゆつの士しあり。童顔どうがん白髮はくはつにして年久としひさしく住すむ。
 或あるときだんこことおよ、道士だうし笑わらうて曰いはく、それ馬うまは、日ひに行ゆく
 こと百里ひやくりにして猶なほ羸はつかるゝを性せいとす。況いはんや乃いま、夜よる行くこと千里せんりに
 餘あまる。寧むしろ死しせざるを怪あやしむのみと。令史れいお驚おどろ
 うまの馬うまははじめより厩うまやを出いささず祕藏ひざうせり。又また家へに騎のるべきものなし。
 何なんぞ千里せんりを行ゆくと云いふや。道人だうじんの曰いはく、君常きみねくわんと宿直とのゐの夜よに
 當あたりては、奥方おくが必かならず斯この馬うまに乗のつて出いでらるゝなり。君更きみさらに知し
 りたまふまじ。もしいつはりと思おもはれなば、例れいの宿直とのゐにとて家いへを
 出いでて、試こころみにかへり來きて、密ひそかに伺うかうて見みらるべし、と云いふ。
 令史れいし、大おほい怪あやしみ、すなはそことばごと、宿直とのゐの夜よ潜よそかに歸かへりて、他た
 所しよにかくれて妻つまを伺うかふ。初更しよかうに至いたるや、病やめる妻つまなよやかに起お

きて、粉黛盛粧都雅を極め、女婢をして件の駿馬を引
 出させ、鞍を置きて階前より飄然と乗る。女婢其の後に續
 いて、こはいかに、掃帚に跨り、ハツオウと云つて前後して冉
 々として雲に昇り去つて姿を隠す。

令史少からず顛動して、夜明けて道士の許に到り嗟歎して云
 ふ、寔に魅のなす業なり。某將是を奈何せむ。道士の曰く、君乞
 ふ潜にうかゞふこと更に一夕なれ。其の夜令史、堂前の幕の
 中に潜伏して待つ。二更に至りて、妻例の如く出でむとして、
 フト婢に問うて曰く、何を以つて此のあたりに生たる人の氣ある
 や。これを我が國にては人臭いぞと云ふ議なり。婢をして帚に
 燭し炬の如くにして偏く見せしむ。令史慌て惑ひて、傍にあり合

おほいなる甕かめの中に匍は隠かくれぬ。須臾しばらくして妻つまはや馬うまに乗りてゆら
 りと手綱たづなを搔か繰くるに、帚ほうきは燃もしたり、婢こしもとの乗のるべきものなし。遂つひ
 に件の甕かめに騎のりて、もこくと天上てんじやうす。令史れいしあへ敢うごて動うごかず、昇のぼ
 ること漂々へうくとして愈々いよく高く、やがて、高山かうざんの頂いたゞぎ一の蔚然うつぜん
 たる林はやしの間に至いたる。こゝに翠帳すゐちやうあり。七八しちはち人に群飲むらがめむに、各おの
 妻つまを帶たいして並ならび坐ざして睦むつまじきこと限かぎりなし。更かうた闌みけて皆みな分わかれ散ちる時とき、
 令史れいしが妻つまも馬うまに乘のる。婢こしもとは又また其甕かめに乘のりけるが心こゝろづ着ちいて叫さけんで
 曰いはく、甕かめの中に人ひとあり。と。蓋ふたを拂はらへば、昏惘こんまうとして令史れいしあり。
 妻つま、微醉ほろゑひの面おもて、妖艷えうえん無比むひ、令史れいしを見みて更さらに驚おどろかず、そんなもの
 はお打うつ棄ちやりよと。令史れいしを突つきだし、大勢おほぜい一いつ所に、あは、お
 ほ、と更さらに空くう中ちゆうに昇のぼり去さりぬ。令史れいしま間の抜ぬけた事こと夥おびし。呆あきれ

て夜を明すに、山深うして人を見ず。道を尋ねれば家を去ること
 正に八百里程。三十日を経て辛うじて歸る。武者ぶり着い
 て、これを詰るに、妻、綾羅にだも堪へざる状して、些とも知
 らずと云ふ。又實に知らざるが如くなりけり。

良夜

唐の玄宗、南の方に狩す。百官司職皆これに従ふ中に、
 王積薪と云ふもの當時碁の名手なり。同じく扈從して行いて
 蜀道に至り、深谿幽谷の間にして一軒家に宿借る。其
 の家、姑と婦と二人のみ。

積薪せきしんに夕餉ゆふげを調へ畢りて夜よに入りぬ。一間ひとまなる處ところに臥ふさしめ、
 姑しうとと婦よめは、二人戸ふたりとを閉とぢて別べつに籠こもりて寢いねぬ。馴なれぬ山家やまがの旅たびの
 宿やどりに積薪せきしん夜更よふけて寢いね難がたく、起たつて簷のきに出いづ。時と恰あたか良り夜やうや
 をり 折をりから一室ひとま處ところより姑しうとの聲こゑとして、婦よめに云いうて曰いはく、風靜かぜづかに露白つゆろ
 く、水青みづあをく、月清つきよし、一山いつさんの松まつの聲こゑ蕭々せうくたり。何どうだね、一い
 つせきゆ 石行つせきゆかうかねと。婦よめの聲こゑにて、あゝ好いいわねえ、お母つかさんと云い
 ふ。積薪せきしん私そかあやし 是この家いへ、納戸なんどには宵よひから燈あかりも點つけ
 ず、わけて二人ふたりの女をんな、別々べつべつの室へやに寢ねた筈はずを、何事なにごとぞと耳みみを澄す
 ます。
 よめ 婦せんては先手みと見みゆ。曰いはく、東ひがしの五みなみからはじめて南みなみの九いしの石しうとと、姑
 言げん下かに應おうじて、東ひがしの五みなみと南みなみの十二にじふと、やゝありて婦よめの聲こゑ。西にしの八

ツから南の十へ、姑聊も猶豫はず、西の九と南の十へ。

恚くて互に其の間に考案する隙ありき。さすがに斯道の達人とて、積薪は耳を澄して、密かに其の戦を聞居たり。時四

更に至りて、姑の曰く、お前、おまけだね、勝つたが九目だけと。

あゝ、然うですね、と婦の聲してやみぬ。

積薪思はず悚然として、直ちに衣冠を繕ひ、若き婦は憚あ

り、先ず姑の閨にゆき、もしくと聲を掛けて、さて、一石願

ひませう、と即ち嗜む處の囊より局盤の圖を出し、黒白

の碁子を以て姑と戦ふ。はじめ二目三目より、本因坊膏

汗を流し、額に湯煙を立てながら、得たる祕法を試むるに、

僅少十餘子を盤に布くや、忽ち敗けたり。即ち踞いて教を乞ふ。

僅少十餘子を盤に布くや、忽ち敗けたり。即ち踞いて教を乞ふ。

姑しうほ微笑ゝゑみて、時ときに起おきて座ざに跪つ坐いたる婦をんなを顧かみて日いふ、お前ま教をへ
 てお上あげと。婦よめ、櫛くし卷まきにして端たん坐ざして、即すなち攻こう守し奪だつ救きう防ぼう
 殺つの法はふを示しめす。積せき薪しん習ならひ得えて、將は天あめが下したに冠くわんたり。
 それ、放はなたれたる女をんなは、蜀しよく道だうの良り夜やうにあり。敢あへて目め白じろの
 學がく校かうにあらざる也なり。

明治四十五年三月・六月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「唐模様《からもやう》」とルビがついていますが、
ます。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

唐模様

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>